

渡辺恒人

一九七三年十月十四日 京都にて
夜の甲子園球場にいた。

球場は想像していたよりも山際の、ほとんど六甲の山腹といってもよい高処にあり、三ノ宮から神戸港にかけての夜景が一望の下に収められた。グラウンドも観客席も深い闇に包まれて静まりかえり、夏の日の球宴の喧騒が嘘のように思えた。

このごろ球場の夜警が、勤務中に次々と謎の失踪を遂げるといふ事件がもち上がっていた。ところが球場側は事態を直視しようと思わず、そんなバカなことがあつてなるものかと思ふばかり、夜警を置くことをやめようとした。その夜私が球場にいたのは、自身夜警の一人だったためかもしれない。さもなければ、話を聞き込んで素人探偵に来ていたのかもしれない。いずれにせよ、この土地の近辺に空飛ぶ円盤が出没するといういまひとつの

噂があり、円盤と夜警の失踪とが無関係ではないかもしれないと私には考えられたのだ。

夜空に向かい眼を皿のようにしながらも、実のところ私は円盤の実在を確信していたわけではない。信じたい気持、不思議なるもの愛好者としてのプライドにかけても信じなければならぬという気持と、生来の懐疑心が心の内で拮抗し合っていて、むしろ、信じているのかいのか自分の気持を確かめようというのが、このような行動を駆った真の動機であるともいえた。

私は待った。無人の観客席の下の方に陣取って、不可能なるものの到来を待った。上、星に似た光点が闇空に、一つ、一つ、一つと次々に現われたかと思ふ間もなく、そのひとつがみるみる直徑を増した。たちまち満月の大きさを凌駕し、輝々として白熱する巨大飛行物体となって頭上に懸かった。信じたくま

も信じ切れないでいた、そればかりか、他人には起こってもこの自分の身にだけはなぜかけっして起こらないのかもしれないという気さえていた事態をいま否応なく眼前にして、私は目も眩むばかりの衝撃に打たれ、金縛りのようになつたまま声にならない叫びを上げていた。しかも次の瞬間には、私は円盤の中に瞬間移送されていた……。四囲は滑らかな光沢をたたえた金属の壁。ほぼ正方形のその部屋には、しかし生あるものの気配はない……。

一九七七年三月十七日 京都にて

地球は異星人に征服されてしまった。

異星人は十代の少年少女から二十人ばかりを選抜し、地球人の人体模型として母星へ連れて帰ろうとしているらしい。私も十代の少年ということになつていたので、模型にされる危険性があった。模型というのは、何か未知の方法で、マネキン人形のように固めてしまふのだという。デパートの売場のような処で私は、模型にされる予定の少年少女が押さへ台上に立たせられ、けいけいといひの微聲を、くづいているのを見ながら、側面では白い若い女が台上に立ち、他の側面では白い

の少年と三人の少女が、長方形のテーブルを囲んで立っている。みなほほえみを浮かべていることはいるが、歪んだような凍りついたような、不自然な微笑だった。幸か不幸か私は白羽の矢を立てられずに済んだらしい。ほつとすると同時に、どんな方法で模型にされるのか何としてでも知りたいという、猛烈な好奇心が湧いた。さだめし異常に残虐な目に遭わされるにちがいない。それはたとえ肛門にパイプを挿し込まれ、ジワジワと（生きたまま麻酔なしで）内臓を吸い取られるといった処置を含むものかもしれない。それを前もって聴かされているのかもしれない。あんなに微笑を恐怖に凍らせているのかもしれない。あれこれ想像しつつデパートを出た。すると広い道路の反対側を、まだ稚い感じの少女が歩いてゆくのが目にとまった。私は、少女は対異星人レジスタンス運動の隠れ家に行く途中かもしれないと目星をつけて、車道を隔てたまま少女のあとをつけ始めた。

いつのまにか私は包丁を手にはしているのだ。これは最初、異星人への反抗のつもりであったが、目立ってしまいかえって危険なだけではないかと途々考え直した。少女の姿が、とあるあばら家の前で消える。私は包丁を

手裏剣投げの要領で電柱に投げつけてから車道を渡り、少女のあとを追ってあばら家に踏み込んだ。学生服を着た少年がひとり、待ち設けていたかのように私の前へ現われた。少年は高校時代の同級の〇君に似ていたが、その卵型の顔には異様なエロチズムが湛えられている。けれども肝腎の少女の姿はどこにもない。見回すと一方の板壁が簀の子ながら隙間だらけで、隣家の内部が丸見えである。土方風の男たちが十人ばかり、円く陣取つてなにやらうち興じている様子だ……。

一九七七年十月十二日 高知にて

東京の家の庭に出て夜空を眺めていた。星の数の異様に多い夜だった。

中にひとつ、火のように赤い星があった。最初、火星かと思ったが、それにしても恒星同様チカチカと瞬くのが解せなかった。よくよく見るとその星は、非常に微細な星層の一群を従えていて、全体でひとつの散開星団を形作っているのだった。同様な星団がすぐ近くに二つ三つと、夜空の奥から次々と見分けられて来る。一瞬、スバルかと思つたが、スバルならば星団の数は七つか八つのはずだ。いくら目を凝らしても、三つ以上は見えない

のが不思議だった。こんな星団が前からあつたかしらん。私は双眼鏡を取つて来ようと思つた。

そのとき、星団が三つとも奇妙な具合にゆらめいた。何とも形容しがたい光の輪のようなものに変貌し、次の瞬間には流星のように夜空を横切つて流れて走つた。どこか遠い地平線の彼方に落ちたようだった。

宇宙からの侵略だ。なぜか私の頭に閃くものがあった。一刻も早く、国外へ逃げ出さなくてはいけない。この夜に先行する日々、私はすでにある調査団の一員となつて海外で活躍していたらしいので、この考えは自然であり、かつ十分実現性の高いものだった。私は家に駆け戻つた。

家には母や兄の気配さえなく、どうしたわけか父ばかりがいたが、別に不審にも思わなかった。ほどなく私は、出国しようにもまだビザが出ていないことに気づかねばならなかった。そこでとりあえず庭に穴を掘つて隠れることにした。それにしても私たちの対策は抜群に早いにはちがいない、人々はまだ事件に気づいてさえないのだから、などと気休めごとを考えながら……。

けれども、見通しが甘かつたのだ。半分も

掘らないうちに、ズシン、ズシン、という地響と共に、巨大な宇宙怪獣が早くも近づいて来たではないか。父は私を、どういいうわけか家の中にいくつも転がっていた段ボール箱のひとつに隠すとひとりで逃げた。箱の隙間からこわごわ覗くと、怪獣は、肉食恐竜ティラノザウルスを何層倍かに大きくしたような、怖ろしい姿をしている。手もなく家を叩き潰すと、段ボール箱を次々につまみ上げては、重さを測るような様子である。私の入っている箱の番になる。と、余りの重量に、さすがの怪獣もいささか手こずる程になってしまった。何ごとかとはばかり恐竜は箱を開く。かくして私はとうとう見つけられてしまった。巨大な口にくわえられ、あわや一呑みにされようとする。

と、そこで恐竜は悪いとどまったのである。どうやら私を仲間と認めたらしい。不思議なことに私には、その理由が分るのだった。とはいえ恐竜の前で私の得たこのあらたな立場も、かなり不安定なものに相違なかった。四畳半と間ほどもある掌に載せられ、面と面とを突き合わせながら、私は宇宙怪獣と、互いとうさん臭そうな様子で見つめ合っている……

れば、きつと非常に重大なものを発見することになるでしょう、と言う。私は少女が霊能者であることを知っていたので、云われた日に東京へ引き返し、云われた通りの時刻に望遠鏡を西の空に向けた。水星か金星か判らないが、昏れかけた空に惑星が三日月になっているの見える。が、別段少女の予言したような重大な異変でもないようである。私は当てがはずれて望遠鏡から目を離した。と、そのとき――

地平線まで続くビルの林の彼方の空に、巨大なもの輪郭が、突如としてそそり立った。しかもひとつだけではない、五つ六つ七つ――

最初それは、途方もない巨きさの、鎧兜に身を固めた中世風の騎士の姿と見えた。が、じきに、人型した大建築物だと判った。たいへん遠距離のはずなのに見上げればかりの高さは、エンパイアステートビルの何倍、いや、何十倍だろうか。それが、見渡す限りの地平の空にケバケバしい色彩をつらね、不気味にも丁度私のアパートを囲むような向きを取って並び立っているのだ。眼下の街々に恐怖と恐慌のどよめきがうわーんと湧き上がった。

一九七七年十一月十三日 高知にて
私は名探偵金田一耕助になって新幹線に乗っていた。岡山から伯備線に乗り換えて、鳥取県境に近いとある小駅で降りる予定であった。何となく、そのあたりの村で私を必要とする事件が発生する、という予感があったのだ。

車中で私は金田一探偵の活躍する、横溝正史の探偵小説を読んでいた。気がつく私のそれまでの行動が、小説にそっくりそのまま描かれているのであった。現実と小説の間には、時間的な一致さえある。静岡を過ぎると弁当売りが来た、という箇所を読んでいると、実際に弁当売りが来る。買って食べながら次の頁をめくると、金田一耕助は弁当を買って食べながら次の頁をめくった云々と書いてある。この調子ならこれからは、小説通りに行動すればいいわけだ、と私は思った。読み進むと、小説では丁度乗り換え駅の岡山である。現に列車はどこかの駅に停車したようである。私は大急ぎで荷物を網棚から降すと、走ってホームへ飛び出した。

すでに日昏れである。幾度か下車したことがある岡山駅と、何となく様子がちがうよう。一瞬にして瓦礫の山と化した街々。そして巨怪建築は、幻のように消え失せていた。宇宙からの侵略だ――私は確信していた。数日何事もなく過ぎた。私は両親の家にいて、到着したばかりの大量のダンボール箱の片付けを手伝っていた。いつの間にか少年に戻っていて、両親も見知らぬ人の顔をしていたが、別段気にもとめなかった。箱にはおおかた本が入っていたようだった。箱にはおおかた箱を捨てようとして、いよいよ本格的な宇宙人の攻撃が始まり、田舎にでも疎開しなければならなくなると、ひょっとして入用になるかもしれないと考えた。あれこれ迷っているうち、ふと、最初の攻撃以来消息を絶った宇宙からの侵略者は、きつと地底に潜んでいるにちがいないと思いついた。

そこで私は、少年自転車競技というものに参加することにした。それは、ある坑山の廃坑を利用して、自転車で地の底まで駆け降るという競技である。やがてその日が来る。思い思いの形をした自転車、スタートラインに並ぶ。車輪が一輪だけのものもあれば、巨

な気がする。ホームを歩むにつれ、阪神間のどこかの駅にまちがって降りてしまったのだと判った。ドアはすでに閉まってしまった。特急ひかりは私を置いて、ゴトゴトと無情に通り返り過ぎてゆく。小説を信用し過ぎた報いで、私は途方に暮れて甕蘭の迫るホームに立ち尽くしている……

それから長い記憶の欠落が来る。我にかえると、どうやら目的の村には行き着けなかったと見えて、神戸近辺のある大学で、睡眠脳波の研究に没頭しているのだった。夢を見ている時とそうでない時とで脳波の波形が変化することを利用して、様々な実験を行なうのであるが、それも捜査の必要からなのだった。この実験にはエレクトロニクスの技術が要るのであるが、金田一耕助たる私は電気的に弱い。そこで、さる筋から若い工学士を紹介してもらって、助力して貰うことになった。

(が、この工学士は、共同研究の途中でゆくえ不明になってしまった。殺されたのかも知れない、と私は疑うが、どうすることもできない。とりあえず十七、八の少女を、後釜に雇い入れることになった。)

ある日少女は私に、某日某時、東京のあなたのアパートの窓から西の空に望遠鏡を向けたら、きつと非常に重大なものを発見することになるでしょう、と言う。私は少女が霊能者であることを知っていたので、云われた日に東京へ引き返し、云われた通りの時刻に望遠鏡を西の空に向けた。水星か金星か判らないが、昏れかけた空に惑星が三日月になっているの見える。が、別段少女の予言したような重大な異変でもないようである。私は当てがはずれて望遠鏡から目を離した。と、そのとき――

地平線まで続くビルの林の彼方の空に、巨大なもの輪郭が、突如としてそそり立った。しかもひとつだけではない、五つ六つ七つ――

最初それは、途方もない巨きさの、鎧兜に身を固めた中世風の騎士の姿と見えた。が、じきに、人型した大建築物だと判った。たいへん遠距離のはずなのに見上げればかりの高さは、エンパイアステートビルの何倍、いや、何十倍だろうか。それが、見渡す限りの地平の空にケバケバしい色彩をつらね、不気味にも丁度私のアパートを囲むような向きを取って並び立っているのだ。眼下の街々に恐怖と恐慌のどよめきがうわーんと湧き上がった。

一九七八年三月二十四日 高知にて
劇場のような建物の前にいた。

私はその、劇場だか映画館だかの従業員だ

つたらしい。私その他にも従業員が何人かまわりについていたような気がする。皆、軀の線に密着したあざやかな色の衣服を身につけ、男女の別も見定めがなかった。

突然、従業員の間に恐慌の波紋が広がった。どうやら、劇場に異星の生物がまぎれ込んで、観客が次々と取り憑かれつつあるらしい。私には劇場の内部の様子が、透視のようにして見て取れるのだった。薄暗い観客席を埋め尽くす黒い影法師の群れ。それが端の方から次々と、何やら名状しがたい変質をこうむりつつある——。私は烈しい恐怖にとらえられて、一目散に劇場の前から逃げ出した。

広い石畳の街路を全速力で走ってゆくと、ほどなく行手に巨大な石の城門が現われる。都市は劇場を中心に円形につくられ、八方に真直ぐな道路が伸びているのだった。城門を抜けると他の都市へと通じる街道である。やはり石畳の路で、見渡す限りの草原を一直線に貫いているのだ。気がつくやうな背後を一群の人々がぞろぞろとついて走っている。私と同じ避難者で、走りながら色々情報を交換した。侵略生物は実体を持たないという説と、柔らかな蜘蛛のようなグシャリとした形をしている、という説とがあった。後の方の説に

を、光速に近い速度で突き進んでいるのだ。た。

それから長い時間が経過し、いくつかのまとまった出来事が船内に展開していったように思うがはつきりとは想い出せない。ある日私は、突然に、深刻な懐疑に陥りてしまったのである。それは、私はすでに例の宇宙生物に知らぬまに知り憑かれていたのではないか、否、それどころかこの自分というものの本体はもと宇宙生物なのであり、地球人の軀に寄生した拍子に、何かの原因で記憶まで地球人に同化してしまった、というのが真相ではないかという疑いである。そういえば人々の私を見る目もどこかよそよそしく、こんな奴がなぜいるのだ、とでも云わんばかりうさん臭げである。おまけに、この宇宙都市に住んで相当長い期間たつというのに、あらためて気がついてみるとひとりの友人も、そればかりかひとりの見知った顔さえもないというのはどうしたわけか。私は透明なパイプよりのものの縦横に走っている、何かの工事現場と覚しい場所に、人々の猜疑と警戒の視線を避けつつ思案にくれている……。

——群衆に追いつけ廻されている記憶があったような気がするが、はつきりしない。追

よれば、彼らは人間に糸を吹きつけ、繭のようにして卵を産みつけるという。科学者のグループが、繭のひとつを捕獲して解剖しようとしている、という噂もあった。私は、かえって危険ではないか、と思った。そのうちに前方にまたしても巨大な石造の城門が迫り、私たちは隣町へ到着した。

私はしかし、城門の前で踏みとどまったのである。城門が、先刻通り抜けて来たばかりのものと同じく、町の様子も、両側に低い石造の建物の並んだ広い石畳の街路とい、突き当たりや遠く小さく見えている劇場らしき建築とい、瓜ふたつなのがうさん臭く感じられたのだった。一瞬思ったことは、堂々めぐりをして元の町に戻ってしまったのではないか、ということだった。次いで、二千五百年後のこの未来では、環状時間道路なるものが発明されていて、空間的にだけではなく時間的にも後戻りしてしまい、このまま町に入ってしまった、また同じことのくり返しなのだ、と考えた。気がつくやうな一緒に逃げて来たはずの人々も、いつのまにかいなくなっている。私は城門に背を向けると草原の中へ駆け入った。

どこまでも歩いてゆくと草叢が途切れ、台

いつめられたあげく、八幡の籤知らずのような場所に迷い込んでしまったらしい。気がつくやうな見慣れぬ部屋にいたのだった。全体は廊下のように細長く、カマボコ型の天井が、何やら巨大な棺桶を連想させた。宇宙船のどのあたりになるのか、見当もつかない。出所不明の強い光が隈なく照らしているが、それがかえって、深い地の底にでもいるような気分を誘うのである。窓はもちろん、出入口らしきものも見当たらず、壁は全面書籍で埋まり、それでこの部屋が図書室だと判った。

私はこの部屋のことを宇宙都市に來てから聞いたことがあった。それは噂だけでだれにも所在の知れぬ秘密の図書室で、禁断の書物に埋もれているのだという。書棚に歩み寄ったたちまちこの図書室の、禁断の部屋たるべき理由が判った。天井から床まで隙間もなく並んでいるのはただの本ではない。一冊一冊がおの一個の世界を、独立の小宇宙を宿して、任意の一冊を読むとはとりもなおさず、この大宇宙にあまた棲息する知的生命の、その中の任意のひとつの意識をわがものとし、彼の日々刻々の生を体験することだとい気がついたのだ。非常な畏怖の念が私を襲った。

地の上に出た。眼下には、一木一草もない黒褐色の平原が広がっている。日はとっぷりと昏れ、暗い空には見たこともない大きな惑星が懸かっている。全体が赤茶けたまだら模様で蔽われ、ところどころ火星の運河に似た線条が走っているのが認められた。惑星の右手には、高層ビルのように巨大なロケットが、荒涼たる風景の真只中に先端を夜空に突き刺さんばかりにそそり立っている。この光景を前にして私は、ああやはり二千五百年後の世界に來ているのだな、という感を強くしたが、何のわけがあつて、またどんな手段で送り込まれたかは、想い出せそうで想い出せない。そのうちに、ふっと、夢ではないか、という疑念が湧いた。

夢であろうとなかろうと、宇宙生物の餌食にされてはたまらないので、私は坂を下ってロケットの中へ入って行った。内部は何十層にも分かれ、迷路のように錯綜した構造を成し、マンションめいた居住区、噴水の立つ公園、何となく生氣を欠いた人々の行き交う広場などがあつた。どうやらこの宇宙船は単なる運搬手段ではなく、一個の独立の都市の機能をも果たすべく建造されたものらしい。気がつくやうに地表を離れ、無辺の暗黒空間

予感に駆られて一冊の本を抜き出す。Aオーレリア、又は夢と人生とある。往時の、夢ではないかという疑いがふつと甦り、疑いを解く鍵がこの本の中に隠されているような気がした。私は本をひらき、読み始めようとした。が、読み始めようとしてこの本の著者のネルヴァルという人が、気が狂って死んだ人であったことを思い出して、おそろしくなって止した。次いで取り出した本にはA偽女佐とあり、著者名は井塚真手夫となっている。井塚真手夫という名には見覚えがないし、題名もいかかわしい感じなので、これも書棚に戻した。三番目に手にした本は見映えのしない灰色の薄汚れた本で、Aポレポ里—現実界とある。たちまち意識の底の方に凍りついた記憶の甦る気配があり、私は自分のあの途方もない懐疑の解けるときに、自分の秘められた正体が自分自身に対して明らかにされるべきが来たことを悟った。一頁目をひらくと、早くもなつかしさが薫香のように立ち昇って来る。私は無我夢中で頁に目を走らせ、たちまち本の中の世界へと吸い込まれてゆく——

へつづく